

昭和三十三年七月二十三日第三種郵便物認可  
昭和三十三年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第一一四号）

# 慈光

第十卷 第九號

## 目次

|              |          |
|--------------|----------|
| 至心廻向の意義（三）   | 近角常観（一）  |
| 常の仰せに常音先生を偲ぶ | 日下部智（五）  |
| 韋提希夫人        | 福島政雄（九）  |
| 生々の善友世々の知識   | 花田正夫（12） |
| 随想断片         | 長谷顕性（16） |
| 正信偈私解        | 白井成允（21） |

# 至心廻向の意義(二)

## 近角常觀

○ 今度石見で、或る一人の老人が、私の話すのをほろ／＼泣いて聞いて居た。聞けば子供が狂人であるとの事であつた。親は狂人の子供が可哀くて仕方がない。大悲の親様は私が色々狂人で間違つたことをする、それが可哀想で見て居られぬ。狂人は自分が狂人である事を知らぬため、よい氣で、色々の真似をするのぢやが、他人にすればこれを見て笑つて居る。それを見て居る親のお心では、居ても起つても在るに在られぬ。「それも此の心配がもとであらう。親は皆一々知つて居る、そのために、このやうに親は待ち受けて居るのぢやぞ」と、私の狂人の様を一々御覽下さる時、仏はぢつとして居られぬのである。「涅槃經」にのたまはく、

如來は一切の爲に、常に慈父母と爲りたまふ。当に知るべし、諸々の衆生は、皆これ如來の子なり。世尊の大悲、衆のために苦行を修し給ふこと、人の鬼魅に著せら

れて狂亂所為多きが如し。と。

○ 今大悲の親様を見て下さるが、茲である。十方衆生は皆狂人ぢや。狂人でありながら、煩惱に狂はされて自分の狂人である事を知らぬのぢや。その狂ひの様を御覽下され、ぢつとして居られず、夫れが可哀想ぢやと言つて下さるのが、仏のお慈悲である。

○ 殊に今度は狂人に御縁が多かつた。私の国でも狂人の親が、狂人の子供にお慈悲を聞かせたいとて連れて来て、私は狂人に話をした。狂人は分つたか分らぬか知らぬが、唯にこ／＼笑つて居る、それを見て居る親の方が、あゝ大悲の親様は、私がこのやうに狂人であるのを見て下されて、それが可哀想ぢやと言つて下さるので御座りますかと、よゝとばかりに泣いて喜んだ。狂人に話して居るのに、聞く

親の方が泣いてしまつた。

○ 氣狂ひにも色々ある。理窟を言つて居るのも狂人ぢや。自分は正しいと思ひ、人の事かれこれ言つてる奴も狂人ぢや。狂人は自分は正しい間違はぬと思つて居るから狂人なのぢや。それだから五劫永劫が有難いのぢや。私がこの氣違ひであるのが、哀れで見て居られぬ故、仏は御苦労下されたのぢや。

○ さてこの處が『教行信證』の中にお示し下されてある。『歎異鈔』にお示し下さる處と、無論同じことなれども『教行信證』は四角い文字でお示し下されてある故に、誰もそれ程に思うて居られぬ。これから記す三心積といふのが即ちそれである。

○ 『信卷』にのたまはく

愚惡の衆生の爲めに、阿弥陀如來すでに三心の願を發したまへり。云何が思念せんや。答。仏意測り難し、然りと雖も、ひそかにこの心を推するに、一切の群生海は、無始よりこのかた、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く、虚偽諂偽にして真実の心無し。是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に、菩薩の行を行じたまひし時、三業の修したまふ

所、一念一刹那も清淨ならざること無く、真心ならざることなし。如來清淨の真心を以て、円融無碍、不可思議不可称、不可説の至徳を成就したまへり。如來の至心を以て諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまへり。則ち是れ利他の真心を彰す。故に疑蓋雜はること無し。斯の至心は則ち是れ至徳の尊号をその体とする也云々。

○ 至心はまこと、信樂は信じ喜ぶ心、欲生は淨土に参りたいと思ふ心である。この三心の願を「阿弥陀如來すでに愚惡の衆生の爲に發し給へり。如何がこれを思念せんや」である。「答ふ。仏意測り難し、然りと雖も、竊に斯の心を推するに云々」……『歎異鈔』で言へば、先程申した「仏かねて知ろし召して云々」の切言葉がここになるのである。世人はこれを、仏が本當に知ろし召して下されたと頂かず、親鸞聖人が斯く言つて下されたのだと頂くから可かぬ。「仏かねて知ろし召して」は親鸞聖人の仰せらるるに非ず、仏が知ろし召して下さるのである。それなればこそ、次の「他力の悲願は斯くの如きの我等が為なりけりと知られて云々」のお言葉が出て来るのである。

○ 故にここでも、仏の本願は仏の事なれば我々には分ら

ぬ。然しながら、其の廣大の本願を、愚禿の頂き心地より、頂き上ぐる時は云々と仰せ下されたのである。すべて親鸞聖人の教行信証は、聖人が直きくお頂き下された、そのあなたの御自督の上より、大悲の思召の程を明かに御誌し下されたのである。さればこそ「弥陀の直説」とは申すのである。『信巻』序文の文に聖人は自ら茲を宣はく茲に愚禿の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家釈家の宗義を披闡す。広く三経の光沢を蒙つて特に一心の華文を開く。且く疑問を至して遂に明証を出す。誠に仏恩の深重なるを念うて、人倫の弄言を恥ぢず云々。

此の聖人の御化導ましますにあらずば、世界広しと雖も我等は本願に値遇するを得ぬのである。

○ 続いて「……一切の群生海は無始より……真実の心なし」……即ち今言ふ一切群生海は皆狂人である。無始曠劫来今日今時に至る迄、穢れ、虚偽、詭ひの心のみにて、清淨真実の心などは毛ほどにも無い。其処で「是を以て如来一切苦惱の衆生海を悲憫し給ひて」である。此の「是を以て」の一言が実に有難い処である。若し一応仏より言はれて直ぐハイと頂ける位なら、仏の本願に入らぬのである。何程力み、どれ程懸命になつても、とてもいかに私故、是を以て如来は大悲の胸を痛めて下されたのである。

○ い。その斯くまことならざる人間を哀れみ、飽くまでその者にまことにし、私の氣の付くまで真実にして下さるが仏のまことなのである。即ち仏のまことは、私のまことならざる処が可哀いとおまことなのである。これが真のまことである。而して其のまことが南無阿彌陀仏である。五劫永劫の御苦勞もこれ一つなのである。

○ 今度、石見では、磯に漁をなし、海草採りて日を暮せる、蒲鋒小屋の中の哀れる人間が、皆その心淋しき胸中に飽くまで見捨て給はぬ仏のおまことなる事を頂いて、南無阿彌陀仏々々と声揚げて喜んでくれた。私はその様を見て、親鸞聖人が「我はこれ賀吉の教信沙弥の定なり」と仰せられたのが思ひ出され、実に有難かつた。斯く一文不知のしやうの無き貧しき人間が、如来の廣大の悲願を頂き、南無阿彌陀仏々々と喜ばせて貰はれるやう御成就下されたが南無阿彌陀仏なのである。

○ 又或人が来て申すに「私はあなたのお通りになる道の側の蒲鋒小屋に住む十六人の子供を持つ貧しき者で御座りませう。今日御座があると聞き、参つて聴聞して見ますと、私如き、斯る者の為に御苦勞下されたお慈悲と承り、ああ有難いと頂かせて貰ひましたが、どうで御座いませう」と、

○ 「……不可思議兆載永劫に於いて、菩薩の行を行じたまひし時、……至徳の尊号を以てその体とする也」とうど如来は此の私が浅聞しき計りに、至心のまことの塊を御成就下されたのである。それは、まことならざる私を、飽迄見捨て給はぬまことなのである。これが至心のまことなのであります。

○ 先達も或る御方の御話に、人生において人を信じて九十九迄信じ、疑ふ可きものは更に無い、が、最後に若しや其の自分の信じてるのが間違つたら、とたつた一つの雲が懸ると、今迄の九十九が皆駄目になり、何うも不安で仕様が無くなると、九十九まで人を信ずると言へば、大層自分が善くして居るやうであるが、たつた最後の一つで皆砕けるのである。第一人間が九十九人迄人にまことにしてゐるなどと思つてゐるのが、まことと無いのである。

○ すると或方の仰せらるるには「人生は皆まことでない、唯仏だけがまことであるとすれば、その仏をまことと思ふ心も人間の心故、矢張りまことと無いでないか」と。人間は結局ここになつて来るのである。斯く人間は自分の為す事もまこととなければ、仏をまことと思ふ心もまことと

○ 如何にもその受けやうが綺麗であつた。それでも氣に掛つたから「如来のお慈悲は斯くくの御慈悲と頂くのでは無いぞ。此方が斯くくと分つたり、思つたりして頂くのでは無いが、その如き分らぬ者のために、親様は御苦勞下されたのではないか。大悲の仏はお前が信ずると否とにかかはらずお前のために昔から御苦勞下されてあるのぢや」と申すなり「廣大の御慈悲は私にさう云うて下さるお慈悲であつたか、初めて承つて有難い。私は何たる仕合せであつたか。一寸参詣して斯る有難き事知らせて貰ひました」と喜び勇んで帰つて行つた。と頂いたのでは何もならぬ。その何ともして見やう無きまことの者の為に、可哀い御心配で、成り上つて下されたお姿が十劫正覚のお姿なのである。その廣大のおまことが初めて私の身にしみて下され、この私のためにそれ程御心配下されたのであつたかと頂かせて貰つた時、初めて弥々真にしてみやうなき事が知らせて貰へるのである。それが一念の信である。

○ よく講話などでは言はるる話に、越中に善六とか申す同行があつて、その息子が何か腹立て、河にはまつて死なうとされた。善六が飛んで行つて追ひつき、貴様何をするかと呼び止めると、死んでしまふと言つて中々聞かない。止めれば止める程、益々はまつて死なうとする。最後に仕やうが

無くなり、その子供を引き抱へて、親が手をつき「あゝわしが悪かつた、どうかこらえて帰つて呉れ〜」と頼んだといふ話である。「何うか帰つて呉れ」と、親に言はれてイヤ〜親の家に帰るのでは無い、親にさう言はれた一念に、親の言葉が胸に届く時「あゝ親に是程までに手を下げ

させたのであつたか、是程までに親は私の行く先を案じての御親切であつたか」と、その一念には謝り果て、帰らざるを得ぬのである。この一念が「聞其名号、信心歡喜、乃至一念」なのである。

## 常の仰せに常音先生を偲ぶ

### 日下部智

近角常音先生の常の仰せは「兄貴が『弟を子供の頃から育てたが、あれに別に不足はなけれども、あいつの我慢のやまぬのは困つたことぢや、可哀なことぢや』と愚痴をこぼしてをるといふことを小耳にはさんだことが、自分の氣付いた初めてであつた」といふことから始まる御話であつた。本誌八号吉田氏「常音先生聞記」の中にある「即是凡数の撰にあらず」の頃に、よくその内容が伝へられてゐる。

先生は毎々のことで、めづらしくもなく、大したことももなく済まない……といったやうな御態度で話をなさつた。先生の御講話は、徒に感激したり、景氣のよいことを話されたりするのではなく、全くそれとは対照的で、出世間の道をじゆん〜と説かれるものであつた。常音先生の御法はいつも同じことで、何かもじや〜と話されるので、どうも続けて聴く氣がしない〜と受け取られた人も

あつたのではあるまいか。先生の御講話は、全く胡麻化しや、はつたりのない、ちみな御話であつた。先生はいはゆる重点主義であらせられたのだらう。信仰の付加物や夾雑物には目もくれず、その核心・焦点に直ちに突入して行かれた、当然のこととして、先生の御話の中心は、毎度々々同じであり、繰り返しくであつた。その焦点は「兄貴の愚痴」によつて「暗闇に他から光がさして来た」御話であつた。

私は長年先生の御教と御世話とを受けたが、先生は与へられる一方であつた。我々信者の立場として、当然先生の御生活の点も考へなければならぬのであるが、こちらは餘裕がないのを口実として、図々しく構へてゐるのだが、先生は一言半句もこのやうな点に関して言及されないばかりでなく、その素振りを見せられることもなかつた。人には徹底的に求め、自ら人に施すことを知らない私は、一方的に先生に要求しながら長年過して来たが、先生は終始一貫与へられる一方であつた。このことは、理想的などいふより、全く出世間的不思議といふべきで、先生の説かれるところを如実に示して下さつた。

兄貴の愚痴を先生に伝へられたのは、兄上常観先生の夫人であらせられたと申されたが、常音先生は、その兄貴の愚痴を聞かれて、別に特別に感激したわけでも何でもなかつたと御話し下さつた。「初めはたゞ『妙なことがあるも

のだな」と氣に當つたくらゐであつた。そのうちに「人が自分のことを氣にかけるといふことがあるのか』『意外なこともあるものだな』と思つた程度であつた」と話された。先生の御講話は淡々として水の如く、劇的であつたり、異状であつたりすゝとは全く無く、水の如く自然に流れ、自然のうちに我々の心に流れ込むものであつた。

先生は「兄貴が兄貴が」で終始されたが、兄貴の愚痴から信仰に氣付かれて始めて、「兄貴も凡夫だな」といふことが分かつた、といふことを付け加へられることがあつた。「それまでは、兄貴は特別な人間であるかの如く思つてゐるが、自分が凡夫だと分つてみて初めて〜兄貴も凡夫だな、悩み多き人間だな〜と分かり、初めてほんとに兄貴に親しめるやうになつたと、微笑しながら話されたものである。

常音先生の常の仰せはまだ続いた。先生はやつと信仰が分かつたと喜んでをられたが、そのうちにまた迷つて求られたとの事である。その内容の詳細は聴き洩らしてゐるが、三年ばかり経つて後には、先生は兄上との協力態勢を離れて、独立して何か仕事をしようといふ様に思ひつめられたやうである。そして最後に、覺悟を決めて、その胸のうちを兄上に話された。その時の兄上常観先生の御話は、常音先生の魂に銘じ、その後の常音先生の「為一人也」

「一心一向」の信仰生活の一本道を決定付けられたものであつた。先生は淡々として語られるのであるが、常観先生の御話は

「分かつたと思つても間違ひ、もう分かつたと思つて、また間違ふ。さういふ風に、間違ひ間違ひ間違ふ奴だから、可哀想だといふお慈悲でないか」

といふ御話であつた。張りつめて兄上に話をされた常音先生は

「勢込んで行つたのに、兄貴の話で他愛もなく一遍で参つてしまつた。それ以来、間違はぬ信仰なんか自分は考へないやうになつた。手放して、何でも来いと考へるやうになつた。」

と申された。「自分は間違はぬのではなく、間違ふからこそその御慈悲だ」といふことは、先生の言動の端々にもあらはれてゐた。終戦前の事であるが、私は先生に揮毫を御願ひしたところ、教行信証の総序の御文を書いて下さつた。出来上つてみると、字を間違はれたところが一ヶ所あつた。先生はそこを指摘されて「どうせ間違ふ奴だから、これでよからう」と言はれたのであつた。この軸は空襲で焼いてしまつたが、先生の御講話とひきくらべ、この間違ひは私には忘れ得ないものになつてゐる。

間違ふまいとして索励し、ぶら下つてゐるやうな信仰と

## 韋 提 希 夫 人

福 島 政 雄

釈尊の方では、また沢山のお弟子が、釈尊がもうやがておかくれになる、涅槃の雲に入りたまふといふところに、沢山のお弟子が集つて居りますが、釈尊は

「自分はこの阿闍世があんなにしてゐるから死ぬるに死なれぬ」

といふことを仰言る。「為阿闍世不入涅槃」といふことばになつて居りまして、これは私、このお言葉のところを近角先生が非常な熱をもつてお話下さつて、その熱の印象が、今でも残つて居ります。

さうして釈尊はお身体から光を出される、それは月愛三昧と云ふ三昧にお入りになる。月愛とはお月様の月と、愛するといふ愛。その月愛三昧といふ三昧にお入りになつてお身体から光がズート出て行つて、王舎城の中に居る阿闍世の今苦しんでゐる阿闍世の身体にその光がふれますといふと、不思議なことには阿闍世の、その臭い痛い腫物がス

は全く対症的な、手放しの「間違ふからこそその御慈悲だ」といふ一点は先生の全生活にあふれてをられたやうに思ふ。間違ふ奴として「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、うちに虚飯を懐けばなり」といふことは、先生の信条であらせられたやうである。私はこの話を先生の所感として書いて頂いたことがあるが、先生が「おしはやくさで」とよく言はれたことにもうかゞはれる。先生の格式ばらない、いはゞ庶民的なうちとけた御態度には、このことがにじみ出てゐた。終戦後の事だが、私は先生を引つ張り出してビールを飲みに行きたいといふのが、念願であつた。経済的に餘裕がなく、遂にこのことを果さなかつたが、これは今思ひ出しても残念で堪らない。先生の常の仰せは先生の全生活に語り出されてゐた。

浩鐘の音は衝き手の力によつてその響きを異にする。常音先生程稀有最勝の方は、私如きには、その響きを打ち出すことは出来ない。常音先生六週忌に際して、花田氏に乞はるゝまゝに、さゝやかなる思ひ出を記した次第である。

ウーとよくなつたとお経ではさうなつて居ります。

ここも仲々いゝところでありまして、阿闍世があんなにしてゐる限り自分は死ぬに死なれぬといふ釈尊の御慈悲の心持といふものが、矢張り暗々のうちに阿闍世にひびいたといふことでありませう。さうですら阿闍世は、もともと自分の腫物といふものは、身の腫物でなく心の腫物でありますと云つて居りますからして、その釈尊の、死ぬに死なれぬといふ心持が何処からひびいたのかひびいて、それぢやから阿闍世の心持がすうと軽くなつたのでありませう。

然しその月愛三昧のひかりと云ふものは、すべての日中の暑い熱が月夜になるといふと涼しくなつて、暑い熱がすつかり去ると、さう云ふ風に釈尊のおひかりといふものは癒やして下さるのであると、かう云ふことを香婆が云ふやうであります。

實際さうでありませう。何時の間にか積尊の御心持が阿闍世の心にひびいた。何処からひびいたか。それは韋提希夫人からであります。韋提希夫人は積尊のおかげでこの苦ししい娑婆世界に落着くといふ心になつて、黙つてしんから看病をしてゐる。その韋提希夫人の、その何とも云はれぬ心が阿闍世にひびいてゐる。それは積尊からたまはつてゐる、仏のお慈悲の心である。それが暗々のうちにひびいて来てゐるのであります。それぢやから韋提希夫人の方では御自身も知られずに居られるのであります。自分が積尊から仏のまことを頂いて、そしてそのひびきが阿闍世に伝はつて、阿闍世王の腫物が何時の間にかすうーと軽くなつてよくなつてきた。韋提希夫人もそのものと力、その癒やす力の出所は御自分も多分自覚的には知つて居られないでせうが、そこが非常に尊いところと思ふのであります。母親の真実といふものが本當になつてくると、さういふものであります。自分は現在、自分の力でこの子供を治して居ても、自分の力で治したといふことを知らずに居るのであります。

これは私が何時もあつち、こつちでお話をする鳩翁道話の中の母親のまことが、不良の息子をすつかり改心させたといふ、あの話の中でもそのことを感じますのであります。いよゝ／＼勘当するといふことになつて、二十六歳の不

ならば自分の生みの子供のために苦勞したい。結婚五十年になりませんが、五十年この方たつた一度のお願い、どうぞこの判をおすことをやめて下さい。お互に子供のあとについて乞食して歩いて、たとひ野たれ死にしてもよいぢやありませんか。子供故に野たれ死に、いいぢやありませんか」

お父さんはしばらく思索してゐたけれど、忽ち判を袋に入れてしまつて、集つてゐる親類の人なんかに改めてお辭儀をして、

「まことに皆様には相済みませんが、今婆さんが申しませうことが、いかにもその通りと思ひますから、もう勘当は致しません。そのかはり、もう絶交されることは覚悟の上であります。明日からはもうものも云うて下さるな。いよいよこの村をたち去る時、皆様方にお金の御無心でも云ふかとお思ひになるかも知れませんが、そんなことは決して致しませんから御安心下さい。もう今夜きり勘当しませぬから、どうぞ絶交して下さい」

その有様を雨戸の隙間から見ていた不良の息子、今にもとびこみさうであつた不良の息子が、その光景、その声を聞いて、何か自分の胸をしめ木でしめられるやうな感じがおこつて来て、そのまま庭先に倒れて、着物の袖を衝へて声をたてぬやうにして泣いてゐる。

良青年であります。それが、親父が今晩は勘当するさうな。親類なんかが集つて、その勘当をいよゝ／＼やる。その誓の証文に、名前の下に判をおすさうな。よし一つその場に踏みこんで、俺を勘当するなら、その勘当料をくれ、と云つて、八十両でも、百両でもお金をひつたくつて、それから唐天竺、何処へでもとんで行くぞ、と云つて、悪い友達と一緒に茶椀酒を呑んで、よつぱらつて、そして着物の端をはし折つて、ソート縁側の方に廻つて、雨戸の隙間から見てゐる。

いよゝ／＼親父が判をついたら雨戸を蹴破つて跳びこんでやれと思つて見てゐると、いよゝ／＼そのお父さんが判をおすといふことになる、仕方がないから「婆さん、印形を持つて来なさい」といふと、お母さんが篋筒の小引出から印形の袋を持つてくる。するとそのお父さんはその印形を取り出して、もうすぐ名前の下に判をおさうとする、その時に、お母さんがその手にするのではありません。すがつて「あの子供をこのまゝにしておいたならば、それは、この家屋敷を三年と経たないうちに人手に渡して了つて、私共は子供のあとについて乞食をして歩かねばならぬことは解りきつて居りますけれども、あの子供を勘当したならば養子をしなければなりません。養子はきつと善い人が来るときまつては居りますまい。どうぞせ子供のために苦勞する

それで柴田鳩翁はかう云うて居ります。

この時、何もこの不良息子が、親が有難いと思つたのであります。けれども、その親の慈愛といふものが身に浸み渡つて、腹腸にまでしみ徹つて、居ても立つても居られなくなつた、暫く倒れて泣いて居りましたが、やがてすつかり着物を整へて、台所の方から上つて座敷に出て来まして、坐つて皆の前で御辭儀をしまして、

「今までは勘当々々と云はれても何とも思はずに居りましたが、今度いよゝ／＼勘当と云ふことになつて大変心細くなつて参りました。どうか皆様のおとりなしで、親達が私の勘当を三十日間日延べして呉れますやうに、お願いであります。若し三十日の間に私の行が改まらなかつたならば、改めて勘当して下さいてもよろしい。どうぞ三十日間日延べして貰ひますやうに皆様からおとりなしをして下さい」

とかう云ふ。

皆の者は一寸困つて居た時であります。親の方は子供は悪くても勘当せぬと云つてゐる。一寸変でありましたけれども、そんなに云ふものでありますから、勘当を三十日、日延べしてやつてはどうでありますかと言はざるを得なくなり、そして息子には「随分親孝行さつしやれ」と云つて帰つて行きます。

それから息子がすっかり改まつた。非常に親につくすのみならず、今迄はその村で、乱暴する、喧嘩する、博奕を打つ、大酒を呑む、悪いことばかりやつてゐたのが、非常に真面目に働くやうになり、のちにはその筋のお役人から非常におほめにあづかる。徳川時代でありますから、庄屋、さういふ役目を仰せつかるやうになりましたが、それから三年程経つてお母さんの方が病氣になつて、今度ははいよいよいけないといふことになつて、その時にお母さんは息子を枕元に呼びまして

「何時ぞや、あの集りのあつたあの晩から、何と申うたかお前がすっかり改まつてくれたので非常に有難い。お前が昔のまま居てくれたらこの母は死んで地獄へ行くより外ないものを。お前がすっかり改まつてくれたから、今この母は死んで極楽に行くに相違ない。有難い」と云つて、その息子を拜みながらお母さんは亡くなられた。

この話をここまで読んで参りますと涙が出さうになるのであります。お母さんは自分の慈愛ゆゑに息子が改まつたといふことを知らぬのであります。「どういふものか、あの時からすっかり改まつてくれた」そんなのであります。

この話は、私が私の母から鳩翁道話といふものは面白いと云はれて、読み初めましたのが、もう私の昔の、中学時

代のことでありますから、昔々のことであります。

それから時々鳩翁道話を引き出しては、今のお話ばかりを読んで居ります。そんなところにひどく感ずるのであります。

さういふ感じから今の韋提希夫人であります。韋提希夫人は自分の心をほして、仏様の御慈悲といふものが、何時しか子供にひびいてゐるといふことは知らぬのであります。知らぬのでありますが、実は斯う云う風にして子供にひびいてゐる。

一方では空中のお父さんの声が聞える。つまりこの阿闍世王が転じて真人間になつて来るといふのが、一方からは母親の、まだ生きてゐる母親、一方からは亡くなつてゐる父親からの、親の念力と申しますか、その親の念力といふものは広大無辺なる仏のお慈悲に触れてゐる、お慈悲にはぐくまれてゐる。その親の念力といふものによつて、阿闍世王といふものが改心して来る。それだから釈尊のところまで行くまでに阿闍世王にはチャンともう準備が、お父さんとお母さんのお蔭で出来てゐるのであります。

未完

## 生々の善友・世々の知識

花田正夫

本年の初春でした。かねて中風症で療養して居られた伊藤猪太郎氏の訃を聞いて、早速雪の日に弔問いたしますと、千代夫人が語られますに、

「主人がいよいよ死に臨みまして、自分は八十歳まで生かして貰つたが、今度はお浄土へ参らせて頂く。そこには三十年前、五歳で大きな声で念仏申して死んだ長男も、十年前、仏様が沢山見えると云つて亡くなつた三男の観も待つてゐてくれる。

お前は生き残つて淋しからうが、仏様はこの様に別々に離れねばならぬ者を憐んで、俱会一処せしめんとお誓ひ下さつてあるから、歎異鈔をよく読み、お念仏のいはれをよく聞いて、間違はずお浄土において、と申し

ありがたや 本願力に手をひかれ

みおやのさとでわれはまつなり

と云ふ歌を書きとらせました。」と。

私は仏前に焼香、誦経申し終つて、いよいよ心に浮ぶのが、十年前の観さんのことでありました。観さんは大阪外

語を卒業し、戦争中は参謀本部で通訳官をして居られましたが、敗戦と共に身も心も打ちのめされて帰られたのです。が、職も家も、万事不如意の中に、結婚生活も破れ、さうした中に一方キリスト教も聞かれ、光明を得ようとされましたが、信仰心もおこらず、御母堂の勧めによつて、昭和廿年の秋の彼岸頃から、時々来庵下され、話し合つて居りました。そのうち昭和廿一年の初め頃から、念仏一つとおのづと心が傾いて来られました。そこに闇中模索の生活の中にあつて自分の道といふものが見出された様でした。

斯くて新春四月に、人生の再起を願つて京大史学科に入學され、宮地廓慧師の至心寮に入り、又浄住寺に榊原徳草師を訪ひ、聞法求道の縁に非常にお恵まられました。

然し昔から禍福はあざなふ繩の如しと申しますが、新出  
発されて程なく、廿一年の八月から肋膜炎の悪化、暑さと  
食料難の中に、腐心されての療養によつて秋十月頃にはす  
こし恢復もされ、心機も大いに開けて、念仏も自然に口唇  
を動かす様になられ、好転せよかしと願ひましたが、廿三  
年の初春、御両親の手厚い看護の下にあつて、安らかに往  
生せられたのであります。時に三十歳でありました。

其の直後、猪太郎氏と千代夫人が御来庵下さつて

「観がたうたう亡くなりました。生前種々お導きを頂き  
ましたが、安心して浄土に還りました。南無阿弥陀仏々々  
々々。先生、生き残る私共夫婦をこれからお導き下さいま  
せ。私は長年軍隊生活をして来ましたが、仏道を求めるこ  
とも無しに今日まで過しました。」

私の家内は寺生れでありますし、五歳で死んだ長男は、  
仏様の使ひだと世間の人から申される様な、高声念仏をし  
て亡くなりました。それでも私は当時血気熾んな軍人と  
て、一向に仏書をひもとくこともいたしませんでした。

ところが今度、国は破れ、家は戦災に焼け、不自由な最  
中に、観は御礼を云ひながら、『仏様が沢山見える』と申  
して最後の息をひきとりました。南無阿弥陀仏々々。

私共夫婦はこの様に深いお仏縁をうけながら、また仏と  
も法とも本当には知りません。この様な頑固な私共のため

相手のことをとやかく云ふ前に、自分の不人情を省みるべ  
きだと思ひました。

### 大悲無倦常照我

四十度の熱でうなされ、頭が割れさうに痛んだこの八月  
の真夏、一度も念仏の出ないのを悲しんだ私。熱が下ると  
共に何が機になつたか知りませんが、ふとお念仏がしまし  
た。私は初め何だか木に竹をついだ様だと思はぬでもない  
のでしたが、いやこれでよいのではないかと思ひ返しまし  
た。即ち私はその時

『我亦在彼撰取中 煩惱障眼雖不見  
大悲無倦照我 ……』

の御文を思ひ浮べたのでした

### 絶対他力の鏡

ある蒸し暑い夜、昔の夢を見ました。昔のある不幸な事  
件の一寸筋を交へた再現です。私は相手をひどく罵り、怒  
鳴りつけて「馬鹿野郎！」と云ひ、その相手の憎々しい顔  
をにらみつけてゐました。それから私はブリ／＼怒りなが  
ら、私の室に帰つて来ました。

アッ！私の顔がその鏡に写つてゐるではありませんか。  
か。而もその鏡に写つた私の顔のなんと憎々しいことか。  
私は餘りの不快さに思はず顔をそらしました。そしたら、  
その瞬間、夢からさめました。

に二人の子は生命を捨てて教へてくれてゐますのに……」  
私の耳には今なほその時の猪太郎氏の声がひびき、眼裏  
にはさめ／＼と泣かれた御姿があり／＼と刻まれて居りま  
す。その時以来御夫妻はひとすちに歎異鈔を読み、縁ある  
時は聞法を続けられて十年、今度中風の再発で、遂に念仏  
成仏せられたのであります。

今は千代夫人が、一筋に念仏聞法を続けられ、猪太郎氏  
の書写された歎異鈔を唯一の力にして居られる姿を見、そ  
こに、「生々の善友、世々の知識」とある唯信鈔の結びの  
言葉をそのまゝに教へられるのであります。

こゝに観さんが最後の病床につかれた頃、至心寮誌に残  
された遺稿を掲げ、謹んで御導きを蒙りませう。

### 伊藤観氏遺稿

小生、昭和廿一年八月中旬、過勞の為、四十度近くの熱  
で病臥の身となり、未だに恢復せず。毎日病床にて熱にう  
なされつつ、心に浮びました「たわごと」とりともな  
く書きつらねました。

### 共にこれ凡夫のみ

私は過去のある不幸な事件で、ある人を余りの仕打と非  
常に悪く思つたことがあります。よく考へて見ますと、  
相手を不人情と思ふ人間が、先づ第一に不人情なのです。

### お念仏は「現はれ給ふ」

お念仏は「称へるものと思つてゐましたが、病氣をして  
『現はれたまふもの』と知らせて載きました。

我ならぬ力のわれにこもり来て

現はれたまふ 南無阿弥陀仏

### 独りゆく旅人

病氣をして、人間は本当に孤独だといふ感じがまし  
た。人間は独り行く旅人です。

「色青ざめし旅のものゝわたくしは〴〵菅の笠ふかく傾け  
て、ただ急ぐ旅人」であります。

併し、寂しく独り行けばこそ、聞ける声があると思ひま  
す。二人で話しながらでは聞けない声です。

句仏上人の句が浮びます。

何処より 我呼ぶ声ぞ 秋の暮

### 仏に正対す。

仏の声は、仏に正対せねば聞けぬと思ひます。而して、  
正対するとは理窟では判らぬといふことだと思ひます。

理窟で救済を論理つけた私が、この夏のある日の午後、  
『それではお前は一体何が頼めたか』

と自問されて、一度に全てが昏迷の深溝に落ち込んだ様  
に感じたことがあります。

そして結局知らせて載いたことは



「何も頼めぬ。自分の理性すら頼めぬ」  
そんな私。不信と疑惑で満ち／＼た自分。そんな人間なればこそ、仏の本願があるといふことでした。

寂しさを主とす

「寂しさを主とす……」と云つた芭蕉の言葉が泌々思はれます。

寂しい時には寂しさに徹する、寂しさを噛みしめて行く彼、芭蕉こそ、本當に天地無窮の声を聞いた人ではないでせうか。

「山路来て 何やらゆかし すみれ草」

私は彼が寂しい人生の旅路にしんみりと味つた清純な法悦境を有難く思ひます。

身はすでに私ならず

病氣して、三十にもなる私を看護して呉れた母、若し私がこのまま死ねば、私は滿三十年間、唯々母に養護して貰つたことになります。私もこの頃になつて、漸く次の歌の意味が解つて来ました。何と云ふ不孝者でせう。

身はすでに私ならずと思ひつ

涙落ちたりまさに愛しく

(中村憲吉 詠)

みちびきの声

何も彼もうそだ、こけだ。

随想断片

長谷顯性

「自分の書いたものを他人に売つてあるくくらしいの心臓がなくちや、今の世に流行しませんよ」とFがいつた。「私たちのやうに自分からあとずりするやうぢや駄目ですよ」Fが重ねていつた。「さうかなあ。その反対ではないかな。人の心にうつたへるものがなくちやならんのでないかなあ。」「人の心にうつたへるものはどんなものなのでせうか」「それは自分をつよくうごかすものでなくちやならんのか」「自分をつよくうごかすものをしつかりつかまへることだらうね」「さうだらうね」

○ 浄土文類聚抄を拜読すると、開卷初頭に「无碍難思の光曜は苦を滅し樂を証す。万行円備の嘉号は障を消し疑を除く」とある。仏のみ名一たびいたれば、苦しみはたちどころに滅してしまふ。そして樂しみが現前する。この苦を滅すといふお言葉を誦すればまずかう叫ばずにをられなかつ

聞えて来るもの それだけが 本當だ  
判らぬことがあつたら 目をつむつて  
大きく呼吸して 念仏だ  
何か聞えて来るだらう きつと何か聞えて来る筈だ  
それが本當のものだ

聞えて来たもののみを話せ、 他は語る勿れ  
他はうそだ、作り話だ。

これが全ての結論だ

聞えて来ぬ時は黙せ そのうちに聞えて来よう

○ 汝、愚か者よ、幾度、スタートへ戻るのだ

もう汝は幾度そんな生活に行き詰つたのか

行き詰つては、仏にかへり

行き詰つては、又かへる

しかし私はこれしか出来ぬのだ。

こんな風な私にも いやこんな風な私こそ

御仏の御目当と知せて下さる

ではなからうか。

た老いたる聖人のお姿が浮んでくる。やつぱりさうだとうなすかせらるゝお姿が。私はどうかと自分をかへりみると聖人のお言葉通り何にもなくなつてゐる。おやつとおもふ。いや何かあるやうだがそれが少しもさはりになつてゐないのはつきりわかる。聖人のお言葉が私のすべてのさほりを消してしまはれたのである。

○ 近ごろ道元禪師の「正法眼蔵」を拜読さしてもろうてる。長い間読んでみようとしてみても読めなかつたものがわからぬまゝにうれしくてならない。「またわがこゝろをさきとせざれ、ほとけのとかせたまひたるのりをさきとすべし」といふお言葉これは何とありがたいお言葉であらう。道元禪師！ 道元禪師！ あなたは私の伯父さんです。聖人さまのお兄弟です。

×月×日雲。午后から香草会の例会を開いた。岩元の婆さんは朝から来られた。学校の用事があるので相手をしてる暇が惜しまれるがよう来られたなといふ気がおこるのを感じた。一時半ごろ、ふと風寝からさめると高山さんといふ方が始めてこの会に来られた。常連の金井さん、河原さんも来られた。会衆十二名。私は正信偈の天親章の「帰入くどくだいぼうかい 功徳大宝海 必獲入大会衆中 得至蓮華藏世界 即証真によほつしやうしん 如法性身」の四句に就いてかたつた。功徳の大宝海とは南无阿弥陀仏の六字なりと知らしていた。ありがたくて泣きだしてしまつた。金井の爺さんは私に早く学校をやめて専門に衆生済度して下されといはれた。

いや済度なんか私のできることぢやない。如来さまがなさいますからと答へた。「自分の愚かさに気づいて仏さまのお心をいたゞくことが何より大事ぢや」と金井の爺さんが大声で叫んだ。ほんにそのとおりだ。午刻名古屋の師より来信。御同慶とあり。嬉しさいはん方なし。

○ ×月×日。妻が京都にゐる長男にたよりに書いてゐるのを読んでみるとうれしくて泣き笑ひをしてしまつた。親の深切は何と深いものであらう。それにしても私自身もこのありがたいたい親心に育まれて来てをりながらそれをないがしろにしてゐることの浅ましき。

老いたる母の姿を礼拝する。

○ 夜半眠ざむれば妻はあゝ苦しいといふ。寝言かと問へばさにあらずと答ふ。昨日田仕事に精を出して持病の神経痛がおこつたらしい。かあいさうなり。されど少しも不安の心おこらず。まことに不思議といふ外なし。おや！ 念仏の声がきこえて来る。耳がごうごうなつてゐるがそれが嬉しい。時計は三時うつた。起床して正法眼蔵を拜読。四十九仏道。五十諸法実相。道元禪師我に慈誨を垂れたもふをおぼゆる。そのいはんとするところは何ぞたゞ仏心のみ。

○ 人のよしあしをいひ、人のおこなひをせめ自らさいなんであるのが自分のすがたとする。これ地獄にのたうちまはつてゐるのだ。どうしやうもない。この私を救ひ出して自らをいたはり人なつかしうさせてくれるものはお念仏のみ光である。

○ あさ駅へ急ぐ途中で向うのAさんが田仕事をしてゐるのに逢ふ。お早うございますと挨拶する自分の心に一瞬何かその人を刺すやうないやだなあといふ感がおこる。この感じはあの人を縁として私におこつたものだとおもふがこの心こそ私のほんとうの鬼の心だ。お念仏が出る。お念仏は

○ お釈迦さまから私に通して来た仏さまの心だ。一切衆生を一子の如くいつくしみたまふみ心だ。あゝ大きなお心だと仰げばみんながなつかしくおもはれてくる。

○ 大空に浮んだ二つのアドバルーン

一つは大きく一つは小さい

ふわりふわりとのぼつて行く

おやふわりとおりて来る

かるやかに

パーンと破裂すれば空と一つ

わしらのことだ

○ 夢の中で説法師子吼してゐた、いよゝゝ立つべき時が来たのか。夢は正夢か逆夢か。

○ この娑婆世界へ如来さまがおでましなされた。南无阿弥陀仏の如来さまが。さあみんな元気でゆきませう。のび〜とゆきませう。

○ 私はさびしい男である。いつもめそ〜というてゐる。私はさびしい男である。そしてさう思うて来た。そしてそれが本当だとおもひ込んでゐた。然しそれは本当ではな

眠

### そら事たわ事

林 和 輔

大正二年十二月廿二日詠

信 心

己が機で思ひ作りし信心はまさかの時に破られぞする  
貫うたる信心ならば破られず異安心ぞと人は云ふとも  
悪しくとも構はぬでなし悪しきをば知つて見捨てぬ親の真心

あ や まり

仰信の人の喜ぶ様を見てかく無ければと思ふあやまり  
喜びの起る心をたよりとし我が信心と思ふあやまり  
願力を頼むと口で云ひながらよくなければと思ふあやまり  
よしあしと思ふ心は世の中の人の迷ひの始めなりけり  
勤むれば善くなるものと思ふこそ弥陀を疑ふ始めなりけれ

(求道、拾巻九号)

正信偈私解 (六)

白井成允

祖聖はやがてこの万善諸行の仮門を出でて善本徳本の真門に回り入り、双樹林下の往生を離れて難思往生の心を発した、けれども、此処に永く往まつたのでなく、此の真門は方便の真門であり、此の往生には難思議往生に到らねば止まり能はぬ果遂の誓が秘められてゐたのだ、と言はれてある。それで今こゝに善本徳本の真門といひ、難思往生の心といふものの意義を窺はねばならぬ。

和讃に言はく、

「至心廻向欲生と

十方衆生を方便し

名号の真門ひらきてぞ

不果遂者と願じける。

果遂の願によりてこそ

釈迦は善本徳本を

弥陀経にあらはして

一乗の機をすゝめける。

定散自力の称名は

果遂のちかひに帰してこそ

をしへざれども自然に

真如の門に転入する。」

善本徳本の真門とは、一切苦悩の有情を愍み救はんとの如来の真実弘誓の門に入らしめん為の方便として有情に向つ

はず、其の願行の結昌たる此の善本徳本の名号を称へつゝ、而も之を己れが善根として修行するかの如き心根に立ち、此の修行の功德を廻らし向けて彼の清浄土に往生せんと励む。如来の名号を仰ぎ受くるは他力にたよる如くである。而も之を自の善根として其の修行に励むのは自力の執着を脱し得るのである。言はく、

「凡そ大小の聖人、一切の善人、本願の嘉号を以て己れが善根となすが故に、信を生ずること能はず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能はざるが故に、報土に入ること無きなり。」

之を疑心の善人と云ふ、之を疑城胎宮の住人と云ふ、金鎖を以て繋がれつゝ偽善の牢獄を出づる能はず、懈慢の妄情牢固として曾て空なるを得ず、則ち純に如来の願心を受くるに由無きのである。然も

「我が弥陀は名を以て物(衆生)を撰めたまふ。是を以て、耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攬入す、永く仏種と為り、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲証す。」

と云ふ。則ち南無阿弥陀仏の体に具はる徳のおん作用が、自然に私共の心の中に染みこんでしまつて、何時の間にか、こちらの修養のおもひが全く名号の中に汲ひこまれてしまひ、たゞ仏の願力から流るゝ法水に融けこんでしまひ、そのまゝ彼の願に報い成れる清浄土にまゐらしめられる。然し

て予め聞かせたまふ門である。その門は第二十願に於いて誓ひ表はされてあると云はれる。言はく

「設ひ我れ仏を得たらんに。十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、諸の徳(の)本を植えて、心を至し廻向して、我が国に生まれんと欲はん。果たし遂げずば、正覚を取らじ」と。(の)字、私に補ふ)

善本徳本とは一切諸善の根本、一切諸善の根本の義であり、其の体は即ち南無阿弥陀仏の名号であらせられる。此の名号は、本是れ、弥陀如来、一切の群生海を愍み救ひたまはんと誓願を發し、光明無量、寿命無量を本として無量無量の徳を成就して之を衆生に恵み与へたまふもの、即ち是れ如来の至徳であり、如来が直に衆生に触れたまふおんはたらきてあらせられる。然るに私共衆生は、如来の此のおんはたらきを蒙りながら、其のおん徳の根源に如来の私の上に直に注がせたまふ哀愍慈救の願心の動けるを知らず、この願行の成就の為に修めたまへる無教劫の苦勞を思

その如来の願力の純に徹り成るまでには如来の永きに互る御苦勞が要せられる、是れ方便の真門の建てらるゝ所以である、是れ私共の自力疑心の堅牢なるに因るが故である。

思ふに、私共は、初め道徳的に一つの願ひをおこす。例へば、善き人になりたいとか、人格を完成したいとか。而して其の願ひを遂げんが為に、例へば修養書を読んだり、反省日記をつけたり、格言詩歌を誦じたり、種々に工夫する。けれどそんな工夫をすればする程愈々感ぜられてくるとは自身のふがいなさといふ事である。日々黒星のつかぬ日もなく、人格の完成などといふ事は雲をつかむような妄想であつて、日夜の所作、いつのまにか是の如き念願を裏切つてばかりある。真面目に努力しようと念じてすぐ不真面目な懈怠な心に陥つてしまつてゐる。そのよくな時に私共の心の必然に動き赴く処は「祈り」である。祈りこそは人の心が何かの危機に於いて救ひを尋ね求める切なる歩みである、其はその人の心の位置によりて高低浅深種々相異なる内容をもつであらう。重き病にかゝつた者は死の恐怖から免れんことを祈る、食に悩む者は財を恵まれんことを祈る、世間に名の聞こえんことを祈り、権力の座に就かんことを祈り、吾が子の身の安らかならんことを祈る。凡そ人の凡百の欲望にして其の満たされざるの極みに陥る時に人の心に必然に湧くものは祈りである。之に由りて凡百の

淫祠邪教がはびこる。皆各それらの欲望に詔ひて之を満たさしむるを約束する。人間惚々として不急の事を争ひ、争ひて神々に祈る。此の如き祈りはすべて是れ理に背き法に違ひ、妄念煩惱の癡り結べるもの、徒らに三界流転の因縁を深め結ぶに他ならない。然るに今省みる所の道徳的精神は、其の願心の内容に於いて此の如きものとは異なる。其は理に順ひ法を敬ふ精神である。仏法の辿りに在りては究竟して菩提を求め、衆生を共に覺道を証せんとする願ひである。此の願ひが今生に於いて満たされ難きものなる事は既に前回修諸功德の門の崩壊に際して省みられた所である。その崩壊にあたりて祈りが生れる。

祖聖の山に於ける修行の途が、初め今生此身に於いて仏陀正覺の境を証せんとの大乗の聖道に存せられた事は、云ふまでもない。其が堂僧としての体験の中に徐に彼土往生の願に遷り、特に念仏三昧の体験に於いて諸の功德を勤め修める事から其等功德の根本と云はれる仏名の称念に遷りゆかれたこと、自然の歩みであられたであらう。則ち是れ自力の崩壊に直面して如来の徳力の加へられんを乞ひ願ふのである。それも幻想的に臨終を期するのではない。現前日日の生活に於いて如来の徳力を身にいたゞいてあらねばならない。仏、願はくはわが身口意を清浄に保たしめ、命終以後必ず仏の浄土に生れしめたまへ——此の祈りに於いて念

心から脱れ得ない。無始曠劫来其を源として生死し来れる我執から離れ得ないからである。悲しむべきである。

然るに如来は、此の如き自力の念仏を事とする者といへども、其の功德を積み廻向することによりて如来の淨國に生まれんと欲する者をみそなはしては、必ず其の志欲を果たし遂げしめん、果たし遂げしめずば御自ら正覺を取らじと誓ひたまふ。此の果遂の願心聞きまつる時、自力称名の人の自力がおのづから奪ひ去られてしまふ、則ち己れのもうす念仏が自ら勤め修める行なのでなくして、唯是れ如来より賜りたる如来の徳の顕現なのであることを知る。古徳の歌に云ふ。

わが称へわが聞くなれど南無阿弥陀

つれてゆくぞの親のよびごゑ

と。称名念仏は本是れ親の招換の声であつた。己れが心を浄め行を正しくして修め称ふるのでなくして、心を浄めんとして浄め得ず、行を正さうとして正し得ざる此の悪業の凡夫の相をかねてしらしめて必ず救ふと誓ひたゝせたまひ、其の誓ひを成就せしめたまふ仏親の大悲のおんはたらきであらせられる。こちらから祈りて獲る功德なのではない。真実に祈り得ざる者を仏の方からやるせなくつれていつてくだざる徳力なのである。

祖聖は、山の念仏を修めてをられる間に、念仏が浄土に

仏三昧が行せられ、此の祈りに於いて称名の日夜が過ぎきたであらうことが思はれる。第二十願の念仏といふものを私は究竟して此の如き祈りの念仏であるように解する。

其は念仏、即ち仏の名号を称へるといふ点に於いて、如来の徳を受けるのである。受けるのであるけれども、其の受ける己れの心を清め行を正しうして受けることが先づ要せられる。其処に祈りがある。この祈りは、かの己れの凡百の欲望、煩惱の満足を求める妄念から発するのとは類を異にし、たゞ菩提を全うせんとする人格の当然の祈りである。此の祈りに於いて念仏が称念せられる。其は人格の道徳的精神の純化として其自ら崇いものであることは疑はれない。けれども現実の人間の身口意が如何にして此の如き崇い刹那に永く住することができよう。ひたすらなる祈りの称名の中に恍惚として我を忘れる歡喜の時が、やがて我が胸の中から湧き来る愛欲・名利・嫉妬・驕慢・諸の煩惱の渦巻によつて覆され、際涯無き荒蕪たる恐怖の闇黒の裡に陥ることを、誰が防ぎ得よう。其の恐怖は、彼の歡喜が大きければ大きい程愈々深く蔽しいものがあらう。此の現実に眼を塞いで、念仏を祈りの如くに修めることに安らはうとするのは、是れ即ち懈慢の心に他ならない。之を自力の念仏といふ。せつかく如来の名号をいたゞきながら、其の根源の願心に徹せず、之を自らの善根として修める懈慢の

往生する唯一の道と知りつゝ、而もその念仏を修める己れの心情の純淨になりきり得ざる現実、三昧恍惚の歡喜の後に来る荒蕪無涯の恐怖に幾度か泣かれたであらう。而して其の極み、祈りは遂に六角堂の觀世音菩薩に寄せる百日の参籠となり、觀音化身の聖徳太子の示現による法然上人への尋ねとなつたのである。六角堂に百日籠られたと等しく、法然上人にも百日の間「降るにも照るにも如何なる大事にも」挫けず、通はせたまひて、遂に「生死出づべき」一大事を解決せられた。之をか三願転入の文に

「今特に方便の真門を出でて選択の願海に転入せり、速に難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す。

果遂の誓良に由有る哉」

と言ひて如来の誓願を讚歎せられたのである。之を亦

「愚秀積鸞、建仁辛酉曆、雜行を棄てて本願に歸す。」

とも告白してをられる。是を以て、祖聖が本願に歸したまうたのは建仁辛酉曆即ち山を去りて法然上人を訪れたまひし時であつた事は疑ふべからず、そしてその時即ち如来選択の願海に転入して難思議往生を期したまふに至つたのである事も亦自然に思はれる事である。而して是れ上の方便の真門なる第二十願に藏せられた果遂の誓の徹到であり、則ち第十八願に転入して其処に安んぜられたのである事を語るものである。

(此の項続)

(六月十九日高槻病院にて)

# 編集後記

灯火親しむ秋となりました。草木もものつて参りました。生死事大、を無言のうちで論へられます。

さて慈光誌上に近角常観先生の御講話を求道誌から転載させて頂けますことは、無上の喜びであります。これを縁とされまして、どうか大悲切々の慈懷に御めざめ下さる様、念じてやみません。

先生は常に「お粥のお念仏」と申されませんが、胃腸の悪い者にはお粥でなくつては消化いたしません故に、親は私共の如き罪業深重の重病人のためにお粥のお念仏をお与へ下さつたのであります。その如く、先生の御講話は、難波な仏語をよく御体解下さいます。懇切丁寧に、平常語をもつて周到な御配意から御話し下されたものが、親の作つて下さるお粥として感銘深いものであります。

又御読み下さつて自分に分らぬ所がありましたら、そこを素通りに読み下されず、繰り返して下されば、未発見の宝蔵が存することでありませう。

御執筆者住所紹介

東京都世田谷区深津町一の一、二九、A二  
四、 日下部智。

東京都調布市仙川町七九四番地、  
福島 政雄。

富山県東礪波郡井波町縄之内

長谷 顕性。

京都市右京区山田葉室町十三

白井 成允。

## フランス通信

グレノーブル 山田 宰

当地の教会などでしばしば見受けられますことは案外若い人達が教会に通つて、お参りをして居りますが、老人の方は非常に少いことで、日本のお寺参りとは逆であると云ふやうなことを皆で話し合つたことがございました。学生なども皆一応宗教に対して関心を持つて居り、日本人学生などが、自分は無宗教だなどと言ふとびつくりするといふことはドイツにおけると同様のやうであります。

併し中には非常にはつきりとキリスト教の神は自分には信じられないといふやうな人もあります。これも関心があるからであります。

これは日本と違つて国にキリスト教の祭日があり幼年時代より、すべての儀式が教会と連つてゐて、教会なしでは生活出来ないやうになつて居ることもあるかと存じます。

然し年をとつて来るとキリスト教には魅力を失つて来るのでありませうか。西洋の

年をとつた人々は本当は淋しいのではないかと思ひます。

福島先生の本の独訳『自由と信仰について』は、出版社から「各方面の評判は非常によいにも拘らず、どうも売れないが、又新に出版社のカタログに入れて、本年もフランクフルトの本の見本市に出す予定です」と申して参りました。今度の滞歐中には池山先生の独文歎異鈔は是非出版までに行きたいと念願して居ります。近角先生の信仰余瀝の独訳原稿は持参して居ります。これも出来れば仏語訳に見たいと思つて居ります。

昭和三年、八月十日。航空便。

第一、二、三日曜例会、廿四日の教西寺法話会。お案内申し上げます。

|        |                |           |
|--------|----------------|-----------|
| 定価     | 一部             | 二十円(送共)   |
|        | 半年             | 百二十円(送共)  |
|        | 一年             | 二百四十円(送共) |
| 編集・発行人 | 花田 正夫          |           |
| 印刷     | 名古屋市千種区千種町馬走二八 |           |
|        | 名古屋市南区匝上町二ノ二八  |           |
| 發行所    | 慈光社            |           |
|        | 振替口座名古屋一〇四七〇番  |           |